
手紙

弥招 栄

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N0660B

【作者名】

弥招 栄

【あらすじ】

また、あの人からの手紙が届いた。私もまた、あの人への返事を書く。

（前書き）

この作品は、十月の企画小説、紙、参加作品です。
他の先生方の作品は、紙小説、で検索すると読むことができます。
ではどうぞ、お楽しみください。

「郵便でーす」

明るい、若々しい声が、秋らしい、のどかな空に響いた。

私は、庭の小さなハーブ畑に水をやっていた手を止めて、振り返る。

「ごくろうさま。いいお天気ね」

この春から、私のところへ手紙を届けてくれている郵便屋さん。

「そうですね。ずっとこんな日が続いたらいいんですけどね。はい、お手紙です」

「ありがとうございます。お茶でもいかが？」

「ありがとうございます。でもまだ配達が残っていますから
いつものやりとり。」

「そう、残念。じゃあ、また」

「ええ、また明日。このくらいの時間にまた来ます」

ニッコリと笑うと、自転車にまたがった郵便屋さんは、でこぼこの坂道を、ゆっくりと下っていった。

その後ろ姿が竹やぶの陰に隠れるまで見送って、私は家に足を向けた。

こんな田舎には珍しい瀟洒な輸入住宅は、今はいないお父様の自慢の家。白いペンキで塗られた壁が、秋の日差しに輝いている。

そして私は、玄関をくぐり、リビングにあるマントルピースの前で、改めて手紙をかざす。そして、鼻先まで持ち上げたその匂いをそっと嗅ぐ。

くすりと、ひとりでに笑みがこぼれた。あの人が、手紙ごとにいるんなフレグランスをつけてくれたのは、もう三年も前のことなのに。今はもう、紙とインクと封蝋の匂いしかしないと分かっているのに。

そのときの習慣は、今では人にもあまり見せられない癖となって、

私の身体に残っている。

あら。封筒を変えたのね。和紙に特有の繊維が、あちこちに透けて見える。でも、宛名の几帳面な楷書は、あの人と手紙のやりとりを始めてから少しも変わらない。

封筒を裏返して見る。やっぱりずっと変わらない、あの人の住所と名前。

ふと、それらが愛しくなって、そつと撫でてみる。あの人につながり、そしてあの人そのものでもある文字たち。

そうだわ。ポプリがそろそろいい頃だもの。今度はあれを入れてあげましょう。ラベンダーとレモングラスが香る、私の自慢だから。その思い付きに気分がよくなって、私はハサミを手に取り、その刃を封筒に当てる。

端っこではなく、真ん中に。

中の便箋ごと、二つに

さらに重ねて四つ切り。そして八つ切り。

お父様が愛用していたオイルライターで、その紙束に火を移し、暖炉の中に投げ入れる。

春からずっとまきをくべていない暖炉の中は、そんな手紙の燃えかすが、うずたかく積もっていた。

がさりという音に、私は目をあげた。

少し肌寒いと思ったら、暖炉にくべたまきが崩れて、火が弱くなってしまう。

頑張りすぎたかしら。

そうひとりごちて、もう一度手元に視線を落とす。年が明けてからとりくみ始めたキルトが思ったより楽しくて、針を動かしていると思わず夢中になってしまう。

でも、もう年かしらね。

首筋を自分でもみほぐしながら、少し寂しくもなる。若い頃は、一日中刺繍を刺していても平気だったのに。

まきを二本ほど放り込んでから時計を見る。

もうこんな時間。

そう思った途端に、ノッカーの音が響いた。

「はあい。……もうきたの？大変」

玄関の、オークの扉を開くと、紺のジャンパーに白い雪をちりばめた郵便屋さんが、真つ赤な顔をして立っていた。

「ごめんなさい。まだ書いていないのよ。どうしましょう」

「いいですよ。待ってますから」

日に焼けて、すっかり男っぽくなった郵便屋さんが、白い息を吐きながら笑う。

「でも、こんなに寒いのに……。そうだ。いま、林檎を焼いているの。よかつたら召し上がっていきませんか？その間に急いで書きますから」

「そうですか？じゃあ、お言葉に甘えて」

さらに相好を崩した郵便屋さんを、リビングに案内する。

「お子さんは？お元気？」

「ええ。おばあちゃんにランドセルを買ってもらって、一日中背負ってはしゃいでいます」

暖炉のオーブンから焼林檎を取り出すと、ナイフをいれてバターを乗せる。仕上げに香りのよいブランデーをひと振り。

「もう小学校なの？早いわねえ。わたしも年をとるはずだわね。さあ、どうぞ。紅茶でいいかしら」

「あ、お構いなく」

ガラスのポットにお湯を注いで、紅茶の葉が踊るのをしばらく眺め、二つのカップに注ぐ。

一つはソファアの郵便屋さんに。

一つはライティングデスクの上に。

そして私は、引き出しから便箋を取り出して、あの人への返事を

したため始めた。

昔は、便箋や封筒にいろいろ趣向を凝らしたものだし、文面も、様々な思いを綴ったものだけど。今は

便箋も封筒も、既製品のありきたりなものだし。

愛用の万年筆が書き記すのも、たった一行。

その一行に、ありったけの想いを込める。

そして、封筒の表書き。

あの人の住所に、無事届くように願いを。あの人の名前に、すべての愛を。

裏書き。私はここにいる。この文字たちが、そう伝えてくれる。

まだ乾いていないインクをなめし革に吸わせてから、便箋を丁寧に折り畳み、封筒に入れて蠟を垂らす。

さあできた。

「お待たせ」

「ああ、できましたか」

郵便屋さんは最後の、大きめの一切れを頬張ると、慌てて立ち上がった。

「あら、ごめんなさい。ゆっくり召し上がっていただいたら良かったのに」

「いえ、まだ配達が残っていますから」

「相変わらず仕事熱心ね」

十年以上前から、何度も聞いたその言葉。

「じゃあ、お願いね」

書き上げたばかりの手紙を、切手代のコインを添えて、郵便屋さんに手渡す。

「はい、確かに。ご馳走様でした」

郵便屋さんは、大事そうに手紙を革の鞆に納めると、ジャンパーの袖に手を通し、あったかいリビングを出ていった。

どんよりとした雲の下、雪がちらちらと舞い降りていた。

リビングに戻った時、私の紅茶は、もう湯気を立てていなかった。

春が来て、夏が来て、また秋が来て。

幾多の季節が、私と私の家のまわりを巡り続ける。

鏡に映る、白髪交じりの頭をみて、染めようかしらと思ったこともあった。

でも、あの人と会うわけでもない。写真を同封するわけでもない。私は私のまま、手紙を書き続ける。

年が明け、また、年が暮れて。

静かだったこの辺りも開発が進み、道路は整備され、きれいな住宅が建ち並ぶようになった。

お父様の自慢だったこの家は、壁のペンキが剥がれ落ち、バルコニーの柱は朽ちて、傾いてしまった。

だけど私の自慢のこの庭は、花の絶えることはなく、道行く人の足を、しばしの間止める。

「郵便でーす」

いつもと同じ、違う声。

「あら、いつもの方は？」

「四郷さんですか？あの人もうすぐ定年なんで、内勤になったんですよ」

「……そう」

四郷さんというのね。

私は、あの郵便屋さんの名前すら知らなかった。

週に一度か二度、私にあの人の手紙を届け、その返信を、必ず次の日に取りに来てくれた。

お孫さんが生まれたと、嬉しそうに話してくれたのは、いつだったかしら。

「じゃあ、これ、お手紙です」

「ありがとう。ねえ、よかったら」

「ああ、分かってます。四郷さんから聞いてます。明日また取りに来ますから」

そういうと、まだ若くて名前も知らない郵便屋さんは、バイクに乗って去っていった。

慌ただしいこと。ゆっくりお茶にも誘えないじゃない。

すっかり手放せなくなった老眼鏡越しに封筒を見る。これだけは、ずっと変わらないあの人の文字。

新しい郵便屋さんは待つてくれそうにないから、今日中に返事を書いておいた方がいいかしらね。

そしてまた、時は流れ始める。

もう使わなくなった暖炉に、うずたかく灰を積み上げながら。

「おばあちゃん。郵便でーす」

久しぶりに、いつもの郵便屋さんの声がした。

一年で、いちばん花が咲き乱れる季節。

庭の真ん中においたエクステリアチェアに腰掛けて、ぽかぽかとした陽気を楽しんでいた私のところまで、郵便屋さんが手紙を持ってきてくれた。

まだ名前は知らないけれど、笑って世間話をしてくれるようになった、もうあんまり若くない郵便屋さんの表情は、なぜか硬い。

「どうしたのかしら？」

「手紙が来てるよ」

それはそうでしょう。それが郵便屋さんのお仕事なんだから。だけど、差し出された封書を受け取って、私は戸惑った。

いつもと違う、つるりとした手触りの封筒。

眼鏡の位置を直して、掲げるように目を凝らす。

黒く縁取りされた封筒の真ん中に、薄墨で書かれた、あの人の字ではない、私の名前。

そう、なのね……

「おばあちゃん……」

心配そうな、郵便屋さんの声。

「ありがとうね。また明日、いつものように、ね」

よっこらしよと、掛け声をかけて椅子から降りると、いうことを聞かなくなつた脚を励まして、玄関に向かう。

「大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫よ」

よいしょ、よいしょと、一歩、一歩。

むせ返るような花の香りにつつまれて、ゆっくりと、ゆっくりと。ずっと、私とともに生きてくれた庭から、ずっと、私を守ってくれた家へ。

そして、いつものように切り刻んだ封筒を、暖炉で燃やす。

リビングのひんやりとした空気に抱かれて、便箋を広げ、万年筆を手に取る。

これまで何度も、本当に数えきれないほど、何度も書いてきた文句。

そしてたぶん、いいえ、きっと最後になる文句。

それをいまいちど、書きましよう。

さっきの手紙のご用事なあと

まど みちお・詞

『やぎさんゆづびん』より

`fin`

（後書き）

この有名な童謡について検索してみると、様々な疑問を、皆さんお持ちになっていることが分かります。

最初の手紙には何を書いてあったのか。やぎさんはどうして自分の手紙は食べてしまわないのか。

この作品には、そのうちの一つ、どうしてやぎさんは読んでから食べないのか、という疑問に対して、私なりの答えを書いたつもりです。

それが、読んでくださった方に伝わったのか、それとも単に、つものままで終わってしまったのか、一言でも書き残していただけかと嬉しいです。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0660b/>

手紙

2010年10月8日15時46分発行